【主題】「音楽を形づくっているもの」に着目し、楽曲の魅力に出会う鑑賞指導

【副題】曲の比較分析と、感性を働かせる多様なアウトプット（表現・身体活動）の試み

【学校・団体名】　栗原市立志波姫小学校
【役職名・氏名】　主幹教諭　北條　智恵子

1．はじめに

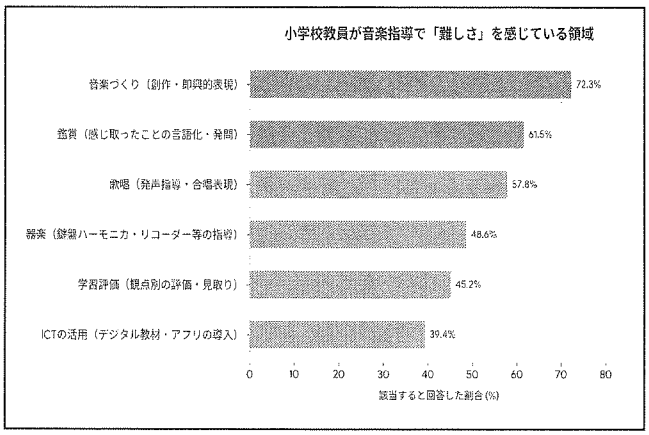
本校に着任して３年目を迎えた現在、筆者は主幹教諭および教務主任を兼務しており、学級担任とは異なる立場から校内全体の教育活動の支援を行っている。その役割の一環として初任者研修を担当する機会を多く得てきた。研修の企画・運営においては、授業研究の計画立案のみならず、一般講義や日頃の対話を通して初任者が抱える悩みや課題に丁寧に耳を傾け、実践に役立つ具体的な指導法や助言をいかに還元できるかを常に模索してきた。

そうした中で、多くの若手教員から共通して聞かれたのが「専科的な技術教科の指導方法が分からない」という切実な悩みであった。特に「音楽科の指導に対して強い苦手意識がある」「指導の引き出しが少なく、授業展開が難しい」といった声は顕著であり、若手教員の負担となっている現状が見えてきた。

こうした現状を踏まえ、筆者自身のこれまでの実践や指導方法を改めて振り返り、整理することは、若手教員が抱える指導上の不安を軽減する上で大きな意義を持つと考えた。

2．研究の方向性

下のグラフは初任者をはじめとする若年層の教員が音楽指導の中で難しさを感じている領域や内容についてサイトを通して調べた結果である。



<図1　小学校教員が音楽指導で「難しさ」を感じている領域>

これを見ると、音楽づくりや鑑賞など、音楽指導の中でも、思考や感性を引き出す指導に課題を感じていることが伺える。

私も以前、鑑賞の授業の中で、「先生、感想って何を書けばいいの。」と途方に暮れる児童の姿を何度も見掛けた。これは、音楽の感じ取り方が児童個人の感覚に委ねられがちであり、「どのように聴けばよいのか（聴き取りの視点）」や「感じ取ったことをどう表現すればよいのか（アウトプットの方法）」が具体化されていないことが一因であると考える。

そこで、今回、これまでのただ静寂の中で楽曲を聴かせる静的な鑑賞から脱却し、音楽を形づくっている要素（速度、音色、音色、旋律など。以下「要素」とする。）に明確に着目させながら、児童の感性を揺さぶり、「楽しんで聴く」「自ら楽曲のよさを発見する」という主体的な鑑賞の姿を目指す。そして鑑賞の指導に悩む若手教員にとって再現性の高い具体的な指導モデルを示す。

3．研究の主題、副題について

上学年（４・５・６年生）の鑑賞指導において、要素と結び付けて聴かせることは、単なる「感想文の時間」から「音楽の魅力に気付き、味わう時間」へと深化させることにつながる。児童がよく口にする「かっこよかった」「きれいだった」「すごかった」という感想は、感覚としてはすばらしいものだが、そこで止まりがちである。要素と結び付けることで、「なぜかっこよく聴こえたのか」に対する「楽器の華やかな音色が聞こえたから」「テンポが急に速くなったから」という根拠が生まれ、自分の言葉で説得力を持って語れるようになる。

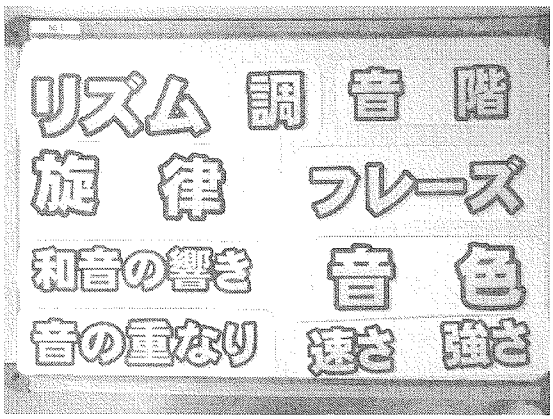
また、「自由に聴いて感想を書こう」と言われると、子供は何に注目すればよいか迷い、集中が途切れやすくなるが、「今日は速度の変化に注目しよう」と視点を絞ることで、集中して耳を澄ますようになる。

さらに、要素を捉えることで、感性だけに頼らず、反復、繰り返し、音の高低など「構造の面白さ」から音楽のよさにアプローチできるようにもなると考えた。

要素と結び付けて聴かせるための具体的な視点は以下の３点である。

（1）「聴くポイント」を可視化する。

黒板に本時の学習で取り上げる要素（音色、速度、旋律など）を掲示する。これは、鑑賞に限らず、音楽の授業で毎回活用できるようマグネットを付けたカードにしておき、授業の際、活用できるようにしておく。鑑賞の授業では、曲を聴く際のポイントとなることから、ワークシートにも明記する。曲を聴き比べる際に要素に気を付けて鑑賞し、終末の振り返りでは、要素に触れながら学習したことを振り返ることができる。学年によっては「今日見付ける秘密は…」と投げ掛けることもある。



＜図２　音楽を形づくってる要素のカード＞

（2）「比較聴取」を取り入れる。

弦楽合奏曲とオーケストラの曲を聴き比べる学習を通して「響きの違い」や「音色の違い」を感じ取らせたり、同じ曲の中でも短調でゆっくりとした部分と長調で速い部分を聴き比べたりさせ、速度や調がもたらす気分の違いを感じ取らせる。また、同じ作曲家の作品を数曲聴き、共通しているところや演奏形態の違いによる表現方法の豊かさに気付かせる。

（3）アクティブなアウトプットと結び付ける。

①自由な表現

曲を聴いて感じたことをワークシートに書かせる場合には、白枠を与え、絵や単語、記号など、自由な発想で書かせるようにする。メロディの高低を線で描いたり、思い浮かぶ景色を描いたり、その曲に合ったゲームの一場面を描いたりするなど感じたことをそのまま表現させる。グループで共有するときには、描いた内容を言葉で伝えるため、内容について質問し合うことも理解の深まりにつながる。

②アクティブクイズ

曲を聴かせ、歌曲の場合は歌詞から、器楽曲の場合は、旋律や音色の感じから曲名や作曲家が表現しようとしたものを当てさせるクイズを取り入れる。また、曲の途中である楽器の音が聞こえたら挙手をしたり、調が変わったら挙手をしたりするゲームを取り入れる。曲名当てクイズでは、グループで意見交換しながら答えを導き出させる。

③身体表現

強弱や速度の変化を味わわせるために指揮者になりきる体験を取り入れる。大きな画面に合わせて指揮者と同様に指揮棒を大きく振ったり小さく動かしたりすることで「強弱や速度」を体感として理解させる。また、弦楽器の学習では、バイオリンやチェロ、コントラバスの演奏を真似することで、楽器の大きさを捉えさせる。

４．実践の展開（授業実践例）

（1）第４学年「旋律の特徴を感じ取ろう」（教育芸術社）／鑑賞曲「白鳥」（サンサーンス：動物の謝肉祭より）Ｒ８．７実施

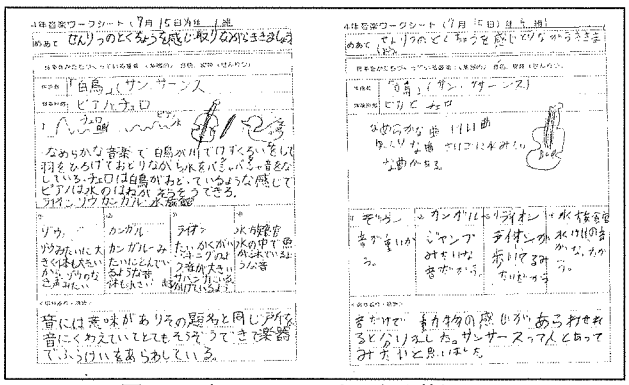
①授業の流れ

ここで扱う要素は、「旋律」と「音色」であることを説明し、ワークシートを配付し、カードを掲示する。曲を聴きながら、チェロとピアノのメロディラインに触れる。

その後、「動物の謝肉祭」の中から「象」「カンガルー」「ライオンの行進」「水族館」の４曲をランダムに聴かせ、聴こえてくる曲と曲名を結び付けるクイズを出題する。この活動は、グループでの活動とし、子供たちの様々な意見を交換しながら考えさせる。答えとそう考えた理由を各グループで発表させる。

最後に、「白鳥」を聴き、感想をまとめる。

②　児童のワークシートから



＜　図３　４年ワークシートの記入状況　＞

児童のワークシートでは、感想を書く白枠の部分に、白鳥の絵や、湖の絵、ピアノやチェロの絵など自由な

発想で思いを表現していた。メロディラインに興味を示した児童は、聴き比べた４つの曲のメロディラインを線で描いていたり、動物の絵を描いていたりする児もいた。その他にも、「象の鳴き声みたい」「魚が泳いでいるみたい」「ジャンプしてるみたいな音」といった様々な例えで表現しながら、積極的に旋律の特徴を探そうとしていた。曲名当てクイズでは、グループの話合いの結果、全てのグループで正解を導き出すことができた。まとめの感想では、音で動物の様子を表すのがすごいと思ったという感想もあった。

（2）第５学年「詩と音楽の関わりを味わおう」（教育芸術社）／鑑賞曲「待ちぼうけ」（山田耕筰）
Ｒ７．１２実施

①授業の流れ

ここで扱う要素は「音色」「旋律」「リズム」である。特に、この題材では旋律やリズムと詩の結び付きのおもしろさについて気付かせたいため、山田耕筰作曲の日本歌曲の中から「待ちぼうけ」と「赤とんぼ」「この道」の３曲を比較させながらきかせた。

まず、「待ちぼうけ」では、歌詞を見せずに、曲を聴かせ、聴こえてくる言葉を注意して聞き取らせて物語につなげる。その後、歌詞とリズムが結び付いているところや、歌う人の表現の工夫に着目させながら三曲の特徴を見付けさせる。「赤とんぼ」では、ソプラノ、アルト、テノールの声も比較させ、声の違いによる感じ方の違いにも触れさせた。

②児童のワークシートから

「待ちぼうけ」では、何度も繰り返して歌われる「待ちぼうけ」「うさぎ」や「木の根っこ」を多くの児童が見付けた。白枠の部分には、「うさぎが？」「のらかせぎ？」など、？マークも多く見られた。そこで、歌詞を見ながら内容を説明すると、（そんな話だったの？）（うさぎかわいそう。）（この人ずるい。）という声が上がった。その後、歌手がゆっくり歌ったり、速く歌ったりする場面と物語の様子を結び付け、曲の面白さを感じ取らせた。「赤とんぼ」と「この道」は両方とも「待ちぼうけ」に比べると、曲の速さがゆっくりのため（眠くなる。）という感想も多かった。また、日本歌曲は、（田んぼや田舎の風景が思い浮かぶ。）という感想も多く見られた。

（3）第６学年「曲想の移り変わりを味わいながらきこう」（教育芸術社）／鑑賞曲「ハンガリー舞曲第５番（ブラームス）Ｒ８．６実施

① 授業の流れ

この学習で扱う要素は「音色」「リズム」「調」「強弱」「旋律」「速さ」である。「調」については、授業の始めに「長調」と「短調」の曲について確認し、音色についてはオーケストラ演奏で使われている楽器に関連させて想起するようにした。また、曲を大きく２つの部分ア と イ に分け、２つの部分を比較させることでそれぞれの特徴をつかみ、曲のよさに気付かせたいと考えた。

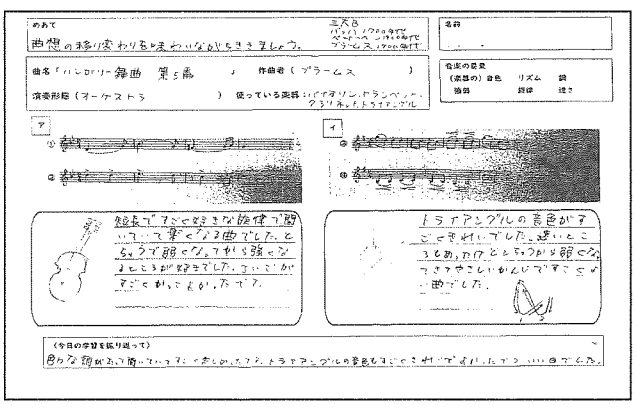
始めはＣＤで ア だけをきかせながら、「長調だったかな。短調だったかな。」と問い掛けたり、「どんな風景を思い浮かべる？」と質問したりした。次に、 イ だけをきかせ、同様の質問をした。その後グループで ア と イ の違いについてワークシートに書いたことを伝え合った。

後半は、オーケストラの演奏風景をスクリーンに投影し、２拍子の指揮の仕方を教えながら、一緒に指揮者の真似をさせた。鉛筆を持たせて映像の中の指揮者の真似をさせたが、ゆっくりの時には大きく動かし、速くなったり小さくなったりするのを楽しみながら一心に鉛筆を振っていた。ノリノリの児童には指揮棒を渡すと、前に出て指揮棒を振りかざし、曲に合わせて表情も真似しながら楽しそうに指揮をする様子も見られた。

「音色」に関しては、 イ の中でトライアングルの音が聞こえたら挙手をするゲームを取り入れた。ＣＤで聞いた時には分からなった児童も、映像で確認することができた。

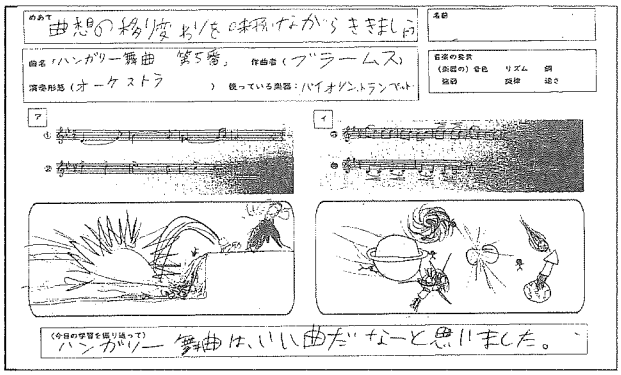
②児童のワークシートから

調の違いや速さ、強弱など、鑑賞のポイントに気を付けながらそれぞれの曲（の部分）を聴くことができた。感想の枠には、弦楽器の絵と共に、「途中で弱くなってから強くなるところが好きでした。」と書いた児童



＜図４　６年ワークシート記入状況①＞

がおり、好きだと感じた根拠を言葉で表現することができていた。また、イの部分では、トライアングルが使われていることに気付き、その音色の効果にも気付くことができていた。振り返りでは、「いろいろな調が使われていていい曲だった。」と、鑑賞のポイントを押さえながら、楽しんで鑑賞している児童の様子が伺えた。



<図5　6年ワークシートの記入状況②　>

音楽にあまり興味を示さない男子児童の中には、感想枠いっぱいにゲームに出てくるような絵を描いた児童もいた。しかし、グループで曲の感想を伝え合う場面では、「アの方は、戦いの作戦を立てている感じで怖い感じの曲だった。イの方は、みんなで一気に宇宙の戦いが始まったという感じの曲だった。」といった説明に、「なるほど。確かにそんな感じもするね。イは速いからね。」という話合いが行われた。そこで、全体の場で「なぜ怖い感じがしたのか。」と質問すると、他の児童が「短調だからじゃないか。」と答えた。そのような話合いの中で短調の曲が作り出す曲の雰囲気にも触れながら、改めて曲全体を味わった。

5　本実践の成果と課題

（1）成果

① 「聴くポイントの可視化」によって、従来の「かっこいい」「きれい」といった感覚的・一言的な感想にとどまらず、「なぜそう聴こえたのか」の根拠（「短調だから怖い感じがする」「急に速くなったから」等）を言語化できる児童が増えた。また、注目すべき要素を絞って提示することで、児童が迷わず目的意識を持って集中して耳を傾ける姿が見られるようになった。

② 題材ごとのねらいや鑑賞させる曲の特徴によって、演奏形態の異なる曲同士の比較、雰囲気の異なる曲の比較、同一曲内の部分比較、長調・短調の比較などを行うことで、様々な楽器の音の重なり、速度・調がもたらす気分の違い、表現の豊かさなどに直感的に気付かせることができた。

③ 感想を文章に限定せず、白枠への描画を認めたことで、音楽が得意でない児童や言語化が苦手な児童も意欲的に参加できた。絵を通したグループ対話から「短調による雰囲気の違い」など本質的な音楽概念へと言語化が深まる場面が生まれた。

曲名を当てさせるクイズや楽器の音を聞き分けるゲーム、映像に合わせた指揮者体験を取り入れたことで、曲の特徴や楽器の音色がもたらす効果、強弱・速度の変化などを体感として捉えさせることができた。

また、授業に参加する子供たちの主体的な姿、鑑賞の学習を楽しむ姿につながった。

（2）課題

① 自由なアウトプット（ゲームの場面の絵など）から、単なる「イメージ遊び」で終わらせず、「なぜその絵・イメージになったのか（どの要素がそう感じさせたのか）」という音楽的な根拠（音色・速度・調など）へ着地させるための、教員側の問い掛けや共有の工夫がさらに求められる。

② 第5年の実践授業で取り上げた日本歌曲の鑑賞指導では、日本歌曲特有の間や緩やかな旋律の美しさといった「曲の深み・魅力」の理解まで高めていくことができなかったため、さらなる教材研究や、指導の手立てを工夫する必要がある。

③ 鑑賞で捉えた「音楽を形づくっている要素」の視点を、歌唱や器楽表現、音楽づくりの学習へどう関連付けて活用していくか検討する必要がある。

6　おわりに

本実践は、音楽科指導に対して不安を抱える若手教員の現状を出発点とし、教員の指導における苦手意識の軽減と、児童の主体的な鑑賞体験の両立を目指して取り組んできたものである。

本研究で示した鑑賞ポイントの可視化・比較聴取・多様なアウトプットという指導モデルは、専門的な技術や知識に不安を持つ教員にとっても再現性が高く、授業構築のための具体的かつ有効な引き出しの一つになり得ると考える。

今後は、鑑賞領域で得られた「音楽を形づくっている要素」への着眼や感性を、歌唱や器楽、音楽づくりといった他の学習領域へどのように相互に関連付けて発展させていくかが検討課題である。今後も教員の悩みに寄り添いながら、児童が音楽の楽しさや魅力に自ら出会えるような授業づくりの支援と実践に努めていきたい。